

# 幼児発達と母子関係

三宅和夫



## はじめに

ここ数年にわたってわたくしたちの研究室は母子の相互交渉関係が幼児の人格形成にどのような影響を及ぼすかという問題に取りくんでいます。この研究の対象になっているのは約四十組の母子で、妊娠中から継続的に研究の対象になっていた組の母子で、妊娠中から継続的に研究の対象になっていた組の母子で、もう学齢に達した子どももおりますし、間もなく入学する子どももいます。わたくしたちは毎年くりかえしてお母さんと子どもの相互交渉関係を家庭を訪問して観察したり、大学の遊戯室や実験室によって母子に自由に遊んでもらったり、子どもにいろいろの課題を与えてお母さんがどんな形で子どもに援助や激励や注意を与えるかを詳細に観察したりしてきました。

まだ十分な分析ができていないわけではありませんが、いくつ

かの興味のある事実が明らかになりつつありますのでその点についてまず少しふれてみたいと思います。

## 母親の子どもに対する有効な働きかけとは

よく親と子の対話の重要性ということがいわれ、対話の欠如から生じる問題が論じられました。しかし対話とは一体、なんなのでしょうか。親が子どもに話しかけさえすれば、対話だというわけにはいかないでしょう。もちろん子どもにほとんど話かけることがないのは問題ですが、単に親が子どもに話かける言葉の量だけの問題ではないと思うのです。それでは質の問題でしょうか。この点についてはイギリスのパーンスティンという学者が研究しています。たとえば母と子がバスに乗っていて、子どもがしっかりとすにつかまっすわっていない時に、ただ子どもに「じつとすわっていないかい」とか「しっかりと

つかまっていなさい」と言ったり、子どもが「どうして」と聞き返したら「うるさいからじっとしていなさい」と言うような母親の言葉は質的に低いということです。これに対して「ちゃんとすわってしっかりつかまっていなさいと、バスが急に止ったらドーンと前に落っこちて怪我するかもしれないでしょう」というような説明は質が高いのです。つまりこれはその場の状況が子どもによく伝えられ、子どもによく考えさせるような有効な働きかけになっているというわけです。ですからバインステインによれば、前者の例のような母親の働きかけがいくら多くても有効ではないということになるのです。

わたくしたちはバインステインの考え方を参考にしながら、母と子の言語的相互交渉関係を細かく分析してみました。子どもも年齢はおよそ四〜六歳です。お母さんの中にはよく子どもに話しかける人もありますし、そうでない人もあります。その話し方についてもバインステインの分類による質の高い話しかけの多いお母さんと質の低い話しかけの多いお母さんがあることもわかりました。ただこれまで分析したところでは全体としては質の高い話し方というのはあまり多くないようでした。

わたくしたちはどのような母子の相互交渉の仕方が子どもの自発的活動を促進させるのかということに関心がありましたので、この点からさらにお母さんの言語的な働きかけについて分

析してみました。すると子どもの活動を促進させるということと母親の言語的な働きかけの量とはまったく関係がないということ、またバインステインのような言語的働きかけの質もそれをその言葉の用いられる状況と切り離してみたのでは必ずしもはつきりと子どもの活動が促進されるかどうかということと関係しているとはいえないということがわかりました。それは一体どんな働きかけがよいのでしょうか。

わたくしどもが分析した事例の中にあまり子どもに話しかけないお母さんがありました。ところがこのお母さんがたまになにか話しかけるとそれは非常に子どもに効果的に影響を及ぼしているのです。このお母さんはタイミングよく子どもに働きかけているように思われます。一方、反対にしょっちゅう子どもになにか話しかけるのですが、さっぱりきき目のないお母さんもあります。お母さんの話すことの内容は必ずしも質的に低くないのですが、子どもの活動はそれによってあまり促進されるように見えません。

わたくしはこのような事実に基づかって、いわゆる教育ママのことを思い出しました。教育ママは子どもが小さいときからあれこれと子どもに知的刺激を注入しようとする懸念です。しかし子どもの要求や興味にどれだけ関心を払っているのでしょうか。ただ一方的に子どもを追いたてるというやり方が彼女らの

働きかけの特徴のように思われます。教育ママの言語的な働きかけの質は必ずしも低くはないでしょう。子どもが小学校へ上る前から百科事典などをそろえ、正しい知識を豊富に与えようと努力し、かなり詳細な説明を子どもにしてやったりするわけですから、一見すればバーンステインのいう質の高い働きかけをする母親のように思われます。しかしバーンステインがいう質の高さというのはその場の事態と独立なわけではありません。つまり子どもがちょうど情報を欲しているとき、子どもがどうしてよいか困っているときに母親が子どもに的確に働きかけてやったり応答してやったりするときに、はじめてその働きかけの質の高低が問題になるのです。ですから教育ママが、「あれも教えよう」「これも覚えさせよう」として必死になって働きかけても、そのような働きかけは決して質の高いものではなく、子どもはそれを受けとろうとしないか、せいぜい受動的に取り入れるだけに終わってしまはいませんか。こうしたお母さんたちがなるべく口数を少なくし、しゃべるかわりに注意深く子どもを見守って、子どもが求めているものがあるかを探知して教は少なくともタイミングよく働きかけたり応答したりするようにすれば、きっと子どもたちはもっと活発で自発的に行動し物を考える子どもになることでしょう。

またこういう教育ママにかぎって、幼稚園は社会性を身につ

けさせ、情操をはぐくむ場所とは考えても、知的教育の場とは見なししていないようです。知的教育は自分が家庭でやる方が効果的と考えているのかもかもしれませんが、そこに問題があるので。幼稚園や保育所で子どもたちが自発的なあそびを通して獲得するものの方がはるかに子どもを知的に伸ばすのだということをよく考えてほしいものです。こうしたお母さんが知的教育は自分がやると考えているだけならまだよいとしなければならぬといえましょう。幼稚園や保育所に彼女たちの考えるつめこみの知的教育を要求しその圧力で保育がゆがめられるとしたら、それこそ子どもにとって不幸なことといわねばなりません。

**母子関係は相互に影響しあう二者間の関係である**

さて、わたくしどもの行なった母子の相互交渉過程の分析から明らかにしたもう一つのこととは、母親の働きかけ方は子どもの行動が変化すればそれにつれて変わるということです。前に述べましたようにわたくしたちは同じ母親と子どもを乳児の時からくりかえして観察しているわけですが、最近分析した一事例について具体的にこのことを考えてみることにします。

このお母さんは子どもが三〜四歳のころはとても口やかましく、指示的命令的で、小言も多く、統制や制限の度合も高かつ

たのです。この子は女の子としては珍しいほど活発でしたが、いささか粗暴なところがあり、近所の子どもを滑り台から突き落としたり、石をぶつけたりすることもあり、母親はこのことをとても悩んでいたわけです。ところがこの子が五歳に近いころにわたたくしたちが母子の相互関係を観察したところ、ようすは前年とはがらっと変わっていました。子どもには乱暴な遊び方をしなくなり女の子らしい遊びをすることが目立ちました。そしてお母さんもわりあい受容的で、子どもの求めにも応じ、指示・命令、統制・制限を示すような働きかけも前年とくらべるとずっと少なくなっていました。お母さんとしてはこの子の変化に安心しかなり満足していたのだと思います。さてさらにその翌年この子が六歳近くになったときに再び母子の相互関係を観察してみますと、また様相は変化しておりました。特に母親は再び指示的・命令的になり、あまり子ども求めに応答的でなくなっているのです。母親の働きかけの仕方は二年前までのそれとかなりよく似ているのでした。それでは子どもがまた乱暴になり手に負えなくなったのでしょうか。事実はその反対でした。一年前とくらべてこの女の子はまた一段とおとなしくなっており、かなり抑圧的に見え、明るさもなくなっていました。おそらく母親はこの子のこうした変化を心配して、あれこれと子どもに要求するという態度に再び変わったのだらうと考えら

れます。ところがこのお母さんは子どもが乳児のころから一貫してそれほど子どもが好きではなく、なるべく手のかからない子に育てようとしていたということも記しておきたいと思えます。つまり母親の子どもに対する基本的な態度はそれほど変化したわけではないということです。子どもの行動上にそれほど問題がなければ、母親は安心しあまり支配的ではなくなるのですが、問題となる行動が発現するとひどく支配的になるというような母親の行動上の変化も、こうした基本的な態度との関連でよりよく理解されるように思われます。

ところで一般にわたたくしたちは母親の働きかけの方を子どもに影響を及ぼす刺激として考え、子どもの側の行動を単に母親からの刺激に対する反応として取り扱うことが多いように思われます。しかしこのような見方が正しくないということはここに上げた事例からもよくわかるのではないのでしょうか。

ある時点において母親が子どもに対してとる行動は、その時の子どもの示す行動傾向に対しての反応ではあっても、子どもの行動をひき起こした刺激条件とは必ずしも考えられないのではないのでしょうか。ですから母親と子どもの関係は、子どもの発達とともにたがい一方が他方に対する刺激となり、また一方が他方からの刺激に対して反応するという相互の交渉過程として考えていくことが必要なのです。よく母親のしつけ方や子

どもに対する接し方を見て、それがその時の子どもの行動特徴を説明するものであるというような見方がされていますが、これはたいへんに間違ったことといわなくてはなりません。特に幼児期は子どもの発達的变化も激しいのですから、母親の側もそれとともかなり変化すると考えてよいでしょう。母子の相互関係というものはそう短期間で十分に理解されるようなものではないということをわたしたちはよく認識しておく必要があると思います。

**子どもが母親の働きかけをどう認知するかが重要である**

いま一つわたくしどものこの研究の過程でわかったことを以下に述べてみたいと思います。よく「あの母親は暖かい人だ」とか「あのお母さんは子どもにとっても冷たくあたる」などということがあります。いったいわたくしたちは、どういうことを手がかかりにして母親が暖かいとか冷たいとかという評価を下すのでしょうか。私たちはいろいろの事例について観察し録画したビデオテープから母子間の言語による交渉過程の記録を作ってみました。その後で母親のしゃべった言葉の中で、子どもに対する受容や承認や賞賛や援助など、暖かさに関係があると思われる言葉の頻度を調べてみました。こうすることによって子ど

もに対して母親が話しかける言葉の内容からみた暖かさというものを一応検討してみたわけです。同様に拒否、否認、叱責など冷たさと関係のあると考えられる言葉の頻度も調べてみました。

一方、わたくしたちのグループは数名で、ビデオテープを視聴し、その直後母親の子どもに対する働きかけに関する尺度を用いて評定を行なってみました。こうして評定の結果と言語の記録の分析の結果を対比させてみようというわけです。ところで評定者は母子関係行動をいろいろの手がかかりを用いて評定すると考えられます。母子間の言語的な交渉もその一つでしょうが、母親の表情などの非言語的行動、母子間の行動が生起する場面の状況や行動の流れも手がかかりとしてよく用いられます。

これまでの分析はまだ完全ではないのですが、事例によっては評定結果の意味するところと言語分析の結果の意味するところがかなり食い違うことがあるという事実が明らかになりました。たとえば、言語分析の結果からは暖かく子どもに接するとみられた母親が、評定では必ずしもそうみられていないというようなことなのです。このことはなにを意味するのでしょうか。一体、母親の暖かさとはなんなのでしょいか。それは、決して母親の行為そのものではありません。子どもが母親からのいろいろの働きかけを暖かいと認知しているかどうかということ

それが決め手になるのではないかと思うのです。評定を行なう場合には母子間の相互交渉過程を全体的、文脈的、関係的にみるわけですから、単に母親の言葉だけを取り出して手がかりにするわけではありません。ですから、ほとんど子どもをほめたり認めたりするような言葉をしゃべらない母親が暖かいと評定されることもあるのです。母親の表情、子どもと母親との関係がしっくりいっているかどうかなど言語以外にいろいろな手がかりがあるのです。

こんなことを紹介したのは、これが日常の幼児への接し方を考える上に参考になると思ったからです。「もっとお子さんにやさしくしてあげてください」などと先生から言われたお母さんは、子どもをほめる回数を多くするように努力したり、子どもからのいろいろな要求を受け入れるようにしてやったり、子どもとともに過ごす時間を長くするように努めたりするのはないでしょうか。しかしここに紹介したわたたちの研究の結果から明らかのように、そのような努力は必ずしも有効であるとはいえないと思うのです。問題は子どもがお母さんの愛情を感じとっているかどうかであって、お母さんの子どもに対する接し方の当否もそのことによって判定されなくてはならないのです。働くお母さんは、幼ない子どもに接してやる時間がすくないということを心配し勝ちですが、時間が短いということが

冷たさと直接つながっているわけではありません。たとえ物的には母親と子どもの接触している時間が短いとしても、そのふれ合いがしっくりとしたものであれば子どもにとって心理的には十分なものであるということなのです。逆に一日中母親と子どもが一緒にいるとしても、心理的にはむしろ接触が不足しているということもありうるのです。こうした問題も母と子の相互交渉関係というものがお互いに刺激となり反応となっていくという関係であるということ、また母親の言語的な働きかけ、非言語的働きかけ等といった個々の行動の一つ一つよりもそれらの全体的な関係こそが重要であるということなどを認識することによって解決されていくことになると思います。

以上、最近わたくしたちの研究の中で感じたことの中から幼児期の母子関係を考える上から特に大切なことではないかと思うことをいくつか取りあげてみた次第です。(北海道大学)